ちいさなかけ橋に徹して

＝米軍基地に三十年＝

青柳福治

米軍進駐

昭和二十年八月十五日、無条件降伏の詔勅がくだり、大東亜戦争は惨敗に終った。生活の総てを戦争にかけ、爆撃の恐怖と飢餓に心身共に疲労は極限に達していた国民は、何はともあれ戦争の終ったことに安堵した。

そしてその日から十三日目の八月二十八日、厚木飛行場に、アメリカ占領軍の先遣部隊が日本本土へ第一歩を踏みいれた。二日後の八月三十日にはダグラスマッカーサー元帥が、同飛行場に降りたち「長い旅が終った……。」との彼の第一声は、あまりにも有名で今に伝わっている。この日以来連日連夜、兵員、軍需物資を積んだ米軍の大型輸送機が次々と着陸し、占領軍の日本本土進駐が本格的に開始された。

九月上旬、厚木飛行場に降りた米軍（推定約二万）は完全武装に身を固め、トラックやジープに分乗し、厚木街道を経て八王子に入り、さらに日野橋を渡り、その一部は旧日本陸軍航空支廠

（現在の米軍立川基地）に進駐、他の一部は府立第二中学（現在の立川高校）に宿泊し、その後旧陸軍航空技術学校（現在の立川基地の東地区にあたる）にそれぞれ進駐を完了した。

彼等を迎えた周辺の住民は「彼等がどんな行動に出るのか。」と、恐怖と不安のあけくれであった。しかし、日本人が彼等に対して持った恐れの念と同じものを、彼等もまた抱いていたことは確かなことであった。日本人がいつ、どこから、どんな形で襲ってくるかもしれないというので、固い武装をなかなか解こうとせず、米兵一人一人の緊張した表情を見ただけでも、そのことは充分うかがい知ることができた。

この頃世間では「若い娘は米軍に連れていかれ、米兵の遊び相手にされる。」という噂がまことしやかに流れ、親たちは田舎の親戚や知人を頼り、娘を疎開させた人も相当数あった。

進駐してまもなく、陸軍航空支廠は米空軍立川基地と名も変わり、九月の末頃からは、基地内の戦災の跡かたづけや、将兵の宿舎、事務所にあてる建物の修理改造などのため、日本人労務者の雇用が開始された。

基地へ就職

ちょうどこの頃、私は、これからの日本では必ず英語が必要になる、生きた英語の勉強をしたい。それには基地に仕事を求め、米人に接するのがいちばんと考え、単身西立川基地の門を叩いた。

門には米兵が二名、手には着剣した銃を持ち完全武装で立っていた。決死の覚悟といえば今はオーバーと思われるが、当時としては本当の話し。

私がおそるおそる近づくと、身のたけ二メートル近い米兵にいきなり両側から銃剣を突きつけられた。私は思わず、両手を上げて立ち止まった。胸の鼓動は早く、顔面からは血の気がひいていくのがわかった。

すると一人がなにやら早口で話しかけてきた。前の晩「こう言われたら、ああ言い、ああいったら、こう答えよう。」と一生懸命に考えたはずなのに、顔面はひきつり、口はこわばり、しゃべることができない。何を言われたのか、さっぱりわからない。しかし、私も大和男子のはしくれ、気をとりなおして、よくみれば、図体はでかいがとてもやさしい眼をしていた。眼を見ているうちに、気持ちが少しずつ落ちついてきたので、勇を鼓し自分の来意を告げたが、外人と始めての会話では、悲しいかな、なかなか通じない。数回繰り返しているうちにどうやら通じたらしい。気がつくと脇の下は冷汗でびっしょり。年配の方がにこにこしながら一緒に来るようにと、手まねきをするので、おそるおそる後をついていくと、近くの事務所に案内してくれた。中に入るとまず耳についたのは、タイプライターの音。大勢の米兵がいっせいに私の方を見る。思わずたじろいでいると、案内してくれた兵隊が、私を一人の将校らしき人の所に連れてゆき、私が仕

事を求めていることを話した。その将校は笑を浮べながら大きな手を出し、握手を求めてきた。生れて始めて外人との握手、私は思わずズボンで手をこすり、おそるおそる手を出す。なんとその手の大きかったこと、そして力のあったこと。（この将校が立川基地初代の日本人担当の労務士官スタンピィ中尉。後四十八年に私が基地で再会した時は、中佐に昇進されていたが、当時は二十代の青年将校であった）私はすすめられた椅子に腰をおろし、あたりを見渡すと、ガムをかみかみタイプを打つ者、机の上に腰をおろしパイプをふかす者、私の方を見てウインクをする者、日本の軍隊では想像もつかないことだ。やがて昼食時間になり、その将校は私を連れて外のジープに乗った。戦争中は木炭車を見なれてきた私には、すばらしい高級車に思われた。

いよいよ私の働く職場に連れていくのかと思っていると、やがてジープは大きな鹿の像のある建物の前にとまった。（ここは旧陸軍の将校集合所であった）中からは、久しく忘れていた肉の臭いがしてくる。どうも食堂らしい。中に入ると大勢の米兵が食事をしている。やはり食堂だ。将校が白い服を着た恰幅の良い米兵（この人はメスサアージャンといって、日本の軍隊の炊事下士官）となにやら話しをしている。「私の仕事のことを頼んでいるのかなあ。」などと考えていると、将校が「一時間ほどしたら戻るから、ここで待っているように。」というようなことを言って、出ていった。

私は空いている椅子に腰をおろしあたりを見る。日本人の姿は一人も見あたらない。大勢の米

兵が食事をしていて、中には珍らしそうに私の方を見ている兵隊もいる。いささか心細くなっていると、さきほどの下士官が、兵隊が使っているのと同じジュラルミン製の食器になにやらたくさん盛りつけ、私に食べるようにすすめた。まず目についたのは、久し振りに対面する分厚い肉、他に今まで口にすることのできなかった物ばかり、果物までついている。戦争中から終戦と、まともな物を食べていなかった私にとっては、まさしく山海の珍味だ。

やがて食事を終えた兵隊たちは、私に声をかけながら手に持ったデザートのオレンジを「プレゼント」といいながら、私のテーブルに置いていく。私があっけにとられているうちに、目の前にはオレンジの山ができた。

やがて将校が戻ってきた。目の前のオレンジを見ると、傍で働いていた一人の兵隊に命じて、大きなダンボール箱を持ってこさせ、自分でオレンジを箱につめ、にこにこしながら「プレゼント」と私に差し出した。おいしい食事をご馳走になった上に土産まで。この人たちが数カ月前までの敵国人で、鬼畜米兵と教えられた人たちと同一人なのだろうか、とても信じられなかった。珍らしさはあったにせよ、敗戦国民の私に、どうしてこのように親切にしてくれるのだろう。言語、肌の色は異にしても、人間には国境のないことを、あらためて痛感させられた。

それにしても、この食堂が職場だと思っていた私をジープに乗せた将校は、再び事務所にもどった。

午後も私は椅子にすわったまま、何も言われない。そこで私は紙片に「私を雇ってくれるのか。雇ってくれるなら、働く場所はどこか。」と書いて、将校に差し出した。彼は私にウインクをしながら「これからこの基地には日本人がどんどん雇用されてくるので、あなたはこの事務所で私の通訳として働いてもらう。明日から出勤するように。」とタイプした紙片を私に見せた。私は自分自身相手の言うことが聞きとれないし、喋ってもなかなか通じないのに、通訳とはたいへんなことになったものだ、明日から来るのはやめようか、などと思った。が男子一たび志をたてたからには、ここで弱気を出してはと思いなおし、翌日から勤めることにした。

日本人労務者と米兵

勤め始めて早々に、冷汗を流したり、赤面するような失敗談がたくさんあるが、それはいずれ機会を見て発表することとし、ここで当時の基地の様子をお話しする。終戦までは現在の立川基地飛行場を中心に西側は、旧陸軍航空支廠、航空技術研究所、そして航空工廠（別名、名古屋工廠とも呼ばれた）と三つの施設がならんでいた。が、米軍はこれら三つの異った施設の境をとりこわし、一つの施設にまとめ、米空軍立川基地とした。

また飛行場の東側には、旧陸軍航空技術学校および立川飛行機株式会社の一部があった。ここはフィンカム（極東資材司令部）と名前も変わり、それぞれ異った使命を持った二つの司令部が、

飛行場を境に東西に置かれた。

その後この立川東、西両基地の整備は急ピッチで進められ、今日の立川基地へとその容貌を変えていった。

昭和二十年終戦後まもなく、立川に〝勤労動員署〟という役所が設けられた。これは米軍が進駐してまもなく、政府の出先機関として設けられたもので、占領軍の要求で労務者を集めるための役所である。米軍側は、基地を至急整備したり、維持をしていくには、どうしても労務者が必要であったが、終戦直後のことでもあり、米人に恐怖感を持っている日本人を集めることは、とてもむずかしいことであった。そこでこの勤労動員署なるものが、警察の協力のもとに、なかば強制的に労務者を集めたり、賃金の支払いなどの責任を持っていた。

かくして人集めの動員令は、立川市内の各町会、隣接の市町村に伝達された。だがいくら基地で働くことをすすめても、つい二、三カ月前まで敵国、しかも固く武装した軍隊の中に入っていくことは、いくら仕事が欲しくてもかなりの抵抗があった。それを説得するのだから、たいへん困難をともなった。各市町村の協力で集められた労務者は、分会長に引率されて、基地の中に入っていく。分会長というのは、立川市内の各町会、隣接町村を分会と称し、分会ごとに集められた、労務者の管理責任者が任命された。これらの人を分会長といった。

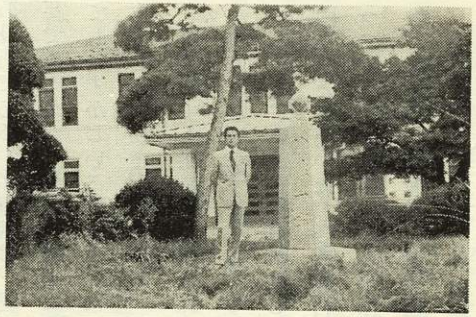
分会には立川市内では高松（佐藤分会長）柴崎（田口分会長）富士見（山田分会長）曙（浦野分会

長）錦（小竹分会長）の各町会、隣接町村では大和（高橋分会長）砂川（荒井分会長）村山（久保分会長）昭和（小松分会長）谷保（佐伯分会長）杉並（亀山分会長）の各町村分会が組織された。分会長さんたちもそれぞれ職業を異にしており、大工、とび職、左官、それにサラリーマン等、それだけに各分会ごとにそれぞれの特色があった。分会長が職人さんのところは職人が多く、サラリーマンの所には、戦時中のサラリーマンが多く集まっていた。分会長さんたちのいでたちもまちまちで、腹掛けに印半纏、地下足袋、軍服に皮長靴等……。

毎朝、各分会長に引率された労務者は、専用通用門（米人と日本人の通用門は別々に設けられていた）を通り広場に整列、でずら（出席）をとられるのである。この作業が終る頃になると、各現場から米兵がトラックで労務者を連れに来る。彼らの要求数に応じて、二十名、三十名と引き渡されていく。

一方分会長は引渡し作業が終ると、自分の分会のでずら帳をもって、前記の勤労動員署に行き、そこで稼動人数分の賃金を受けとるのである。

労務者は、働き始めはどんな仕事でも仕事にありつけたということで、みんな喜んで仕事につ



就職のためとびこんだ米軍の建物（後方）と筆者。塔には山下奉文将軍筆の字が見える。

くが、だんだん馴れてくると、どこの現場は仕事が楽で、どこの現場の米兵は人使いが荒い、などということがわかってくる。そうなるとトラックを持って迎えにきた米兵の顔を見て、その現場に行くのをいやがったり、逆に自分を売りこんだりするようになってきた。だが整列順に引き渡されるので、自分勝手なことは許されない。そこで労務者の方もいろいろ考え、嫌な現場行きのトラックに乗せられた人たちは、現場に向う途中、車がストップサインで止まるたびに、一人二人と後ろの方から飛び降りる。米兵は運転をしているので、ぜんぜん気がつかない。このようにしてずらかった要領のよい連中は、朝出席を取られると同時にでずらがついているので、あとはどこかで一日暇をつぶし、夕方すまして分会長の所に一日の賃金を取りにいったものだ。

一方、現場に着いたトラックには老人やら、気のよわい人たちだけ。確かに受けとったはずの人数が、着いた時には半数ぐらいになっている。頭にきた兵隊は、事務所へどなりこんでくる。その苦情承り役は私の仕事。でもいったん渡した以上は後のまつり、適当になだめてお引きとりを願う。ところが、中には簡単にはひきさがらない。大和魂ならぬヤンキー魂を持ったのがいて、私の手に負えぬことがある。こうなると労務士官にご出馬願い、説得してもらうことと相なる。こんなことはたえず繰り返された。

そのうちに兵隊の方もいろいろ考え、労務者を引取りにくる時は二人で来るようになった。一人が運転、他が後ろの荷台に労務者と一緒に乗りこむ。これではズラかることもできない。こん

なことでこのトラブルも自然に解決されていった。

このような労務問題に、いつも適切な処置をとってくれたのが前記のスタンピイ中尉であった。彼は鋭敏な頭脳と、人間的な深い情愛の持ち主で、国境を超えていつも日本人をかばってくれたので、当時の基地労務者たちにはたいへん慕われ、尊敬されていた。今思えば、このような彼の人間性が買われて、破壊された立川基地の建設と、日本人の反米感情を、一日も早くなくするための、日米親善という重責をはたす適任者として、初代の労務士官に就任されたように思われる。

日本人に乱暴な振舞をする米兵を、阻止してくれたのは、いつもこのスタンピイ中尉であった。ある時一人の労務者が、血相を変えて、事務所に飛びこんできた。スタンピイ中尉の澄んだブルーの眼が一瞬緊張した。話はこうだった。

現在立川基地西地区にある野球場は、今はすっかり整備され、立派なグランドになっているが、（ここで数年後には読売巨人軍の二軍が、たびたび来ては米人チームと試合をしていた。巨人軍の投手は、オールドファンならよく知っている大友投手がまだ二軍のエースで、その後まもなく一軍に昇格した）終戦直後は日本軍の飛行機の残骸が山のように積まれていた。油とほこり、その上、泥まみれ、そして切口がギザギザのジュラルミン、それを一つ一つ手でかたづけていくのである。当時は手袋があるわけではなく、ろくな靴もはいていない。その上いつも空腹で体は弱りきっている。

その日作業中、ある老人が空腹と疲れで腰をおろし休んでいた。それを見た監督の若い兵隊が、仕事をさぼっているものと思ってか、あるいは他の者への見せしめにと思ったのか、老人にガソリンをかけ、ライターを出し、火をつけようとしているとのことだった。私がそのことをスタンピイ中尉に伝えるや否や、中尉は私をジープに乗せ現場に向かった。

着いてみるとなるほど話のとおりだった。

ボロ服はガソリンでびっしょりとぬれ、恐怖と苦痛に老人は身をかがめふるえていた。中尉の到着がもう少し遅れていれば、彼は本当に火だるまになっていたかも知れない。中尉のはからいで、老人は作業服があたえられ、あたたかい食事も与えられた。この事件のあとで聞いた話だが、くだんの兵隊は罰をうけ、重労働を課せられたということだった。

言葉は通じなくても、老人はもちろんのこと、同僚の者たちも、彼の処置を感謝するとともに、彼に対する尊敬の念はますます深まっていった。こうした若い一中尉の行動は、それまでの米人に対する考え方を、大きく変えさせたといっても過言ではあるまい。

このころは、労務者が出入りする門を、労通といって、私が始めて仕事を求めて立った門より、少し立川よりにあった。（現在この門は閉鎖されている）門には、立川警察より派遣された警察官が立っていて、出入の際身分証明書を調べたり、持出し物などの検査をしていた。

ある日私の所に連絡があり、「労務者が帰る時間に、持出し品の一斉検査をするので、立合っ

てもらいたい。」ということだった。時間になって私が門の所で立っていると、出てくる労務者一人一人の持物の中を見たり、服の上からさわって見たり、かなり厳重な検査をしていた。兵隊さんにもらったのであろう、タバコ、チュウインガム、キャンディなど、子供の土産に持っていってやろうと大事に持ってきたのに、証明書のない物はかたっぱしから没収されてゆく。

いくら寒い時とはいえ、歩くのもやっとぐらいに着ぶくれした一人の老人がやってきた。

警察官が、着ているボロオーバーを脱がして見ると、なんと作業服の下には兵隊のセーター（GIセーターと呼ばれていた）を三枚、同じくGIシャツを三枚も重ね着していた。大きな靴を脱がして見ると、これまた、GIソックスを四足もはいている。古い戦闘帽の中にはアメリカの石鹸が二個。持てるだけのものを持ち出してきたというところ。あまりのことに警察官も笑い出してしまった。もちろん兵隊の証明書はないので、品物は全部没収。さんざんしぼられた老人は、しょんぼり、今にも泣きだしそう。見るに見かねて、警察官になんとかできないかと頼んでみたが、規則は曲げられぬということでだめ。物資がなく、基地に入れば、外では不自由している物ばかりがやたらと目につく。こんなことにも敗戦の悲哀を、しみじみ味わさせられた。

昭和二十一年に入っても食糧事情は悪く、日本人はお金よりもまず食糧を確保することにきゅうきゅうとしていた。米軍では時どき、粉、麦、缶詰などを放出してくれたが、これとて焼け石に水。

食糧事情が悪く、基地勤務者の中には弁当を持ってくることができず、昼食時になると兵隊の食堂の残飯あさりをする者がいた。食堂側では残飯を食べられ腹をこわされてはたいへんとトラシュ缶（残飯入れ）の中にガソリンをまいた。それでも残飯あさりはなお後を絶たないで困っている、という話をすると、彼はたいへん同情して、「食糧確保のためには出来るだけ援助をするから、買い出しの方法を考えるように。」ということだった。私はさっそく前記の分会長さんたちに相談した。その結果、地方へ食糧の買い出しに出かけることになった。

だが当時は、物資統制令がしかれており、食糧の移動は厳重に取締まられていた。まして他県への買い出しなどは至難であった。県境いには〝ヤミ〟を取締る検問所が設けられ、そこを通る車は必ず調べられた。

労務士官に買い出し計画を話すとそくざに、「米軍のトラックと米兵の運転手を出してやろう。」といってくれた。占領下の当時では、米軍の車はどこの検問所もノンストップ。喜んだ私たちは、三台のトラックに分乗、栃木方面に向った。現地に着いてみると、田舎ではまだ米人を見るのが始めてという人が多く、同行の米兵を見て逃げだしたり、家の戸締りをしてしまったり、あるいは遠くからこわごわ眺めている。でも子供たちは人なつこく、チョコレートやチュウインガムをもらい、すぐ兵隊と仲良しになった。これを見た親たちも、固くしていた表情をやわらげ、私たちの来た目的を話すと、とても好意的で、米、麦、蕎などを安くゆずってくれた。また

兵隊には、とっておきの自家製ドブロクなどを振舞い、手まねでなにやら談笑している。米人の持っている陽気さが、彼等の警戒心を和らげてくれたのだろう。こんな光景を見ていると、半年ほど前まで続いていた、あの悲惨な戦争はうそのように思われた。

トラックに満載された食糧には、シートがかけられ帰路に向う。心配された、途中の検問所も無事通過。基地に戻り、各分会に公平に配給した。この時の基地従業員の喜びようは、今も忘れることのできない思い出の一つである。

その後、買い出しは何回となく続けられた。そのお陰で、当時の基地の日本人はずいぶんと助けられた。また、基地に務めると、食糧の特配があるということで、基地の就労希望者が急激に増加したのも事実である。

また当時、基地の倉庫（西立川の門を入ってすぐ左側の倉庫）には、米軍に接収された日本軍の品物、毛布、軍服、下着類、靴等、当時の人々がお金を出しても容易に手に入らず、食糧とともに切望していた品物がそのまま残っていた。ある時、私は労務士官に、この品物を基地勤務者に配給してやるように指示された。買い出しの食糧の特配とともに、この衣類の放出は、時の基地勤務者にどれだけ役立ったかもしれない。

〝いやおうなし〟という言葉があるが、占領下の当時は、その言葉はどこにでもあてはまった。基地においては、それがなおさらであった。今でもあるが、西立川駅の所から基地の中に鉄

道の引込線が入っている。これは、本国から送られてきた、食糧、日用品類が横浜で荷上げされ、さらに貨車で運ばれ、基地の中で荷下ろしされるためのものであった。（この引込線の所は、貨車が入らない時は警備兵がいないので、兵隊が、自分のガールフレンドを連れこんだり、またデートを楽しむのによく利用されていた）

この引込線の所でのできごとも、私の記憶に残るものの一つである。

ある日の午後、労務士官より、今夜中に貨車の荷下ろしを完了させなければならない緊急作業があるので、至急労務者を三十名揃えるように、と命令を受けた。徹夜作業になるので、要求された人数を揃えるのに苦労したが、割増し給料と夜食の出ることで、やっと人数を確保した。その中で少し英語のわかるI氏に、あとのいっさいを頼み帰宅した。

翌朝、昨夜のことが心配で、少し早目に出勤すると、I氏が疲れきった表情でやってきて、昨夜はひどい目にあった。もうあのような夜の作業はこりごりだ、と前置きして言うには……。

三十名が夕方より荷下ろし作業を始めているとまもなく、自動小銃を手にした米兵が、三、四人やってきて、作業場の両端に立ち、作業者を見張っていて、用をたすのも兵隊があとについてくるありさま。これは、品物が盗まれないように、ということと、作業を明朝までに完了させるために、労務者の逃亡を防ぐための警戒であったらしい。いくら敗戦国民とはいえ、銃を突きつけられての作業とは、全員情ないやらくやしいやらで、やりきれない気持で作業を続けた。やが

て夜もふけ夜食の時間となった。十五名ずつ二組に分かれて夜食をとることになり、最初の組が兵隊の引率のもとに食堂につれていかれた。食堂には、サンドイッチが用意されていた。十五人はそれをきれいにたいらげ、次の組と交替した。ところが、騒ぎはこれからだった。

あとの十五名が食堂に行くと、食べるものはなにも残っていない。食堂側では間違いなく三十名分のサンドイッチを用意してあったらしいが、あやしげな通訳のせいか、始めの十五名が全部自分たちが食べてもよいものと思い、後の組の分まで食べてしまったわけだ。さあ後の組はおさまらない。食堂の方は、予定通り三十人分用意をしておいたのだから、それ以上は作らないというし、一方、後組の方は空腹でこれ以上作業を続けられないから、家に帰してもらいたいと言いだした。帰られては困るので、兵隊は銃を突きつける。中に入ったI氏は、両方から責められ処置に窮した。やっとのことで、缶詰を出してもらってその場をきりぬけ、予定通り作業を完了した、ということだった。

銃を向けられながらの作業などには、今後はいっさい応じられないというI氏の言葉を労務士官に報告し、「二度とそのようなことはさせない。」という約束をとって、やっと作業者の機嫌を直してもらった。

〃シャラ　アップ〃

このようなトラブルを繰り返しながらも、飛行場を真中に、東西に分かれた立川基地は着々と整備が進められていった。

二〇四〇メートルの滑走路が、立川基地の中心を南北に走った。夜間は、何百燭光の赤、緑のシグナルランプが滑走路を鮮明に浮き出し、飛行機は昼夜の別なく発着するようになった。こうして地味であった日本陸軍の飛行場は、夢とロマンの照滅する華やかな米軍基地へと変貌していったのである。

長い間、暗い耐乏生活をよぎなくさせられてきた日本人にとっては、急速に変わっていく米軍基地の姿に、驚きと、あらためて国力の相違を再認識させられた。

昭和二十一年八月立川東部地区は「フィムカム基地」、「西部地区は立川基地」と呼ばれ、日本人労務管理事務所が誕生し、労務者はそれまでの〃日雇〃から常用に切替えられ、ゲートパス（通門証）が発行された。

これまでの労務者の給料は一律一日いくらと決っていたが、職種別にそれぞれの日額が決められた。その主なものをひろって見ると、

大　工　三七円　（ただし雨天の場合　五五円五〇銭）

左官　三五円（　〃　五二円五〇銭）
重労　二五円（　〃　三七円五〇銭）
板金工　三五円（　〃　五二円五〇銭）
電工　三五円（　〃　五二円五〇銭）
塗装工　三五円（　〃　五二円五〇銭）
雑役　二二円（　〃　三二円　）

以上のように給料面では大幅に改善されてきたが、雇用や解雇はまったくでたらめで、兵隊が自分のガールフレンドを経験もないのにタイピストとし採用してみたり、その親戚の者に適当な職種をつけて雇用をさせることなどは、日常茶飯事であった。

また兵隊の機嫌をそこねると、たちどころにパスは取り上げられ、即日解雇となる。昭和二十七年占領軍時代が終わり、講和条約が結ばれるまでこのような状態は続けられた。

昭和二十三年私が独身で基地の寮で生活をしていた頃の話である。

ある夜の十時頃、突然数名の憲兵が寮に入ってきて、全員すぐ外のトラックに乗るようにと、大声でどなっている。ほとんどの人が寝ていたので、みな寝巻姿のまま、いったい何事が起ったのかと眠い目をこすりながらトラックに乗った。

連れていかれたのは憲兵隊の二階大部屋で、全員二列に立たされた。私たちの周囲には目つき

の悪い憲兵が五、六人、手に棍棒を持って歩きまわっている。

そのうちに一人の下士官が、通訳（この人は国籍不明で、あやしげな日本語を使い、日本人のことをなんでも米人につげ口し、基地従業員から蛇蝎のごとく嫌われていた）を連れてきていうには、「実は少し前、基地の中で勤務についていた一人の憲兵が、何者かによって後頭部を兇器でなぐられ大怪我をした。犯人は日本人らしく、基地の中に逃走したので、その時間基地の中にいた者をとりしらべている。この中には必ず犯人がいるはずだ。判明するまでは一人もここからは出さないので、早く帰りたければ自白せよ。」ということだった。連れてこられたのは三十名ぐらい。私の顔見知りの人たちで、いずれもまじめな従業員たちばかり。怪しげな人物などはいるはずがない。私たちも無言ならば、憲兵も無言。しいんと静まりかえった部屋に、ただ彼等の歩きまわる足音だけが聞こえてくる。約一時間ぐらい経過した頃、立たされたままだったので疲れからか、気持の悪くなる人もでてきた。しゃがみこもうとすると、憲兵がいきなり棍棒で頭を叩く。私も当時は若く人一倍血の気が多かった。あまりのばかばかしさに腹がたってきたので「この中に犯人などはいない。調べるのなら他に方法があるだろう。」と言うと、一人の憲兵が「シャラアップ（だまれ）。」と言うといきなり、肩のあたりをいやというほど棍棒で叩かれた。占領下の悲しさ、それ以上の反抗はできない。そうこうしているうちに夜も明け、あたりが明かるくなり始めた頃、一階がなにやら騒がしくなり、一人の憲兵が二階に来て言うには「犯人が日本の警察官に逮捕さ

れた。」ということだった。彼等は一言の謝罪も言わず、我々を再びトラックに乗せて、寮に送りとどけた。

一睡もできなかった私は、事務所に出勤せず床についていると、出勤しない私を心配した労務士官が、同僚にようすを見によこした。昨夜の出来事を彼に話し、士官に伝えるよう頼み寝ていると、こんどは士官が直接やってきて、「これから憲兵隊に行き抗議をするから、一緒にくるように。」という。憲兵隊に着くや、士官が昨夜の下士官に何やら話をしてから、二階にあがった。昨夜とは反対に、二階には憲兵が一列にならんでいた。士官は私に、「この中に昨夜お前をなぐった兵隊がいるはずだ、その兵隊を見つけ出すように。」と命じた。憲兵たちは皆青い顔をして、〝もし、お前が本当のことを言うと、あとでどのような目にあうか知れないぞ〟とばかりに、私をにらみつけている。見まわすと、たしかに昨夜私をなぐった憲兵がいた。彼は青い顔をしてうつむいている。よく見ると、まだ童顔の若い兵隊だ。なんだか可哀想になってちゅうちょしていると、士官が、何も心配することはないから早く探すように、と催促するので、勇を鼓して本人を指さすと、士官が当人にその事実を確認した。彼は小さな声で「私がしました。」と答えた。

そのことがあって数日後、私が耳にしたのは、その若い憲兵は、翌日モンキハウス（悪事をした兵隊が、入れられる収容所）に入れられ、重労働が課せられたということだった。

占領下であれば、このようなことも、ふつうは泣き寝入りになることなのに、人種を超え、日

本人の人権を尊重し、公平な裁きをしてくれたこの労務士官は、今もって忘れることのできない米人の一人である。

朝鮮動乱

昭和二十五年、朝鮮動乱が勃発した。アジア政策の拠点であり、国連軍の兵站（へいたん）物資補給基地となった立川基地は、毎日百数十回の飛行機の離着陸があり、朝鮮への兵員、軍需物資は必ずこの立川基地を経て輸送された。また傷病兵が基地の病院にぞくぞくと送還され、戦乱がはげしくなるにつれ、その数も増加していった。基地の日本人従業員も、残業や徹夜作業が要求され、それでも人手が足りなくて、関係外の職場の人たちの応援を得ては爆弾の積込作業がなされた。それだけに収入も増え、たいへんな景気となり、終戦から今日に至るまでで、一番基地の中で活気を呈したのもこの頃であった。

同時に立川周辺の街々には、野戦帰りの兵隊と、彼等をとりまく女性たちのあやしげなさんざめきが四六時中くり広げられていた。その女性の数は最も多い時は、約五〇〇〇名と推定された。北は北海道、南は九州と全国から集まってきた。

立川で生まれ育ったある老人が、こんな話を私にしてくれた。

「立川には終戦直後から、そうだなあ、十年ぐらいはこうした女性相手の宿が軒をならべてい

たよ。この部類の女の子が大手を振ってまかり通り、まじめに働く者なんぞ馬鹿に見えるような時代だったからなあ。今立川の街で立派に店を構え、大きな商売をしている人たちの中には、こうした女の子相手の宿をして太った人が大勢いるよ。とにかくこうしたことをするか、闇屋をやるかのどちらかをやらねば、食っていけない時代だったからなあ。今はすべてが良くなり、こうした昔のことなんぞ、ともすれば忘れがちだが、立川はもちろん、近隣の町々が現在のように発展したのは七分通りは、アメリカさんと、これらの女性のおかげよ。」と当時を語ってくれた。

その頃の調べによると、全国の米軍基地数は七三三カ所、その総面積は実に十四万ヘクタールにおよび、こんな狭い日本の国の約三〇パーセント近くが接収されたのである。しかも無一物から立ちあがらなければならなかった日本人にとって、最も重要な、そして最も必要とする箇所のほとんどが接収されたのであった。

ここにあらためて「無条件降伏」といういかにしても動かすことのできない現実に、当時の人々は砂をかむ思いで堪えねばならなかった。

どこの国でもそうだろうが戦宣布告を決定するのは、ほんの一部の人間で、それによって人々の生活はおびやかされ、果ては生命までも奪われる。ことに戦死者を出した家族には戦争の勝敗などよりももっと切実なものがあったと思う。これは勝ったアメリカ、負けた日本の両家族の気持はまったく同じだったと思う。戦争に勝ったからといって、死んだ父、夫、息子、兄弟が生き

返えるではなし、失われた物がもどってくるわけではない。これは勝利を治めたアメリカにとっても同じことだ。彼らとてスムーズに勝利の道を進んだわけではない。その過程においては、どれほど日本軍に辛酸をなめさせられたか知れないのだ。

ともあれ、敗戦でどん底にあった日本経済は、この朝鮮動乱を境にしだいに上向きになってきた。基地もその使命完遂のために連日従業員の雇用をなし、終戦から今日にいたる間でこの時が最も基地従業員数が多く、一時は立川東西両地区を合わせると二万人を超えた。（昭和五十一年現在全国の米、陸・海・空軍施設勤務者数は、三軍をあわせても三万を割っている）これは立川基地だけではなく、横田基地でも、そして全国に散在していた各米軍施設でも同じような状況であった。

昭和二十七年、昭和基地（現在の昭和飛行機）に極東米空軍軍用犬訓練センターが開設され、極東における約一八〇カ所の空軍施設の弾薬庫、倉庫、燃料補給所、レーダー基地等の警備に一役をかった。同センターでは平均六〇頭のシェパード犬が、十三、四名の日本人軍犬訓練士によって、常に調教されていた。こうして昼間訓練を受けた軍用犬は、夜間は取扱者（日本人警備員）とともに警備につく。犬は夜間において、最もその性能を発揮する。人間の何倍もの力を有するあの鋭敏なる臭覚聴覚視覚等により、完全なる状態の下においては、四万ヤード離れた人の存在を、同行の取扱者に知らせることができるそうだ。人間の視覚が著しく制限される夜間、広範囲の警備区域のパトロールには、この軍用犬の利用価値は大きく、絶対必要とされていた。

昭和二十七年四月、日本国民待望の講和条約が締結され、終戦から続いた長い占領軍時代はここに終った。そして日米間に、安全保障条約が結ばれたのである。これを境に基地日本人従業員の身分は、従来とくらべて大幅に改善され保証されたので、従業員は安心して就労することができるようになった。しかし、講和条約が締結されたにもかかわらず、昭和二十八年に立川では、ハウスメイド（米人家族のお手伝いさん）の検診問題が起きた。これは米人家族への病気感染予防対策のため、軍側が人権を無視した特別の身体検査をメイドさんたちに強要したために起きた問題であった。占領下ならばともかく、講和が結ばれ、日本の法律が適用されている日本人が、いかに使用者側の要求とはいえ、人権を無視した身体検査に、メイドさんたちは断固として反対、これを拒否した。私も当時は、人事管理担当者の一員として、この事件の解決には大いに頭を悩ませた。このことは、当時の週刊誌にも大きく取上げられ、社会問題となり、ついには国会議員さんたちの出馬を見るにいたった。あまりにも問題が大きくなったため、軍側も日米間の友好に傷がつくことを憂慮し、身体検査の内容を変更することで、この問題は解決された。

基地拡張と砂川闘争

昭和二十九年、政府は基地拡張の計画に基き、立川基地続きの民有地、一七万五〇〇〇平方メートルを買収し、滑走路を北側に一八〇メートル延長することを計画、これを当時の砂川町長に

通告した。

これに対し地元民は、基地の拡張は砂川町への影響があまりにも大きいとして、強い反対の意を示した。

三十年五月、砂川町議会は拡張反対を決議し、反対闘争委員会を結成して強硬に反対。ここに砂川闘争の口火は切られた。

しかし、翌三十一年十月十四日、測量を強行するたびに流血を見るので、防衛庁長官は、滑走路延長の測量を一時中止することを発表した。ちょうどこの頃、基地の中では米軍が立川基地に移駐して以来、基地内の諸施設の改善が大幅に行なわれ、それまでのテント式や、カマボコ型の兵舎に寄宿していた兵士たちは、モダンでスマートな二階建の宿舎が与えられた。また米軍家族住宅が、千戸以上も建ち、クラブを始めとし、軍人軍属の娯楽施設も整い、当時としては最も完備された米軍基地となった。

同じくこの頃、基地内では国際結婚をする日本女性のための、花嫁学校が開かれていたが、その卒業式では、米婦人赤十字会代表者、米軍牧師、日本基督教団体からは、国分寺教会の深田牧師らが出席し、結婚生活に入ってからの必要事項の説明、無事コース修了のお祝いのあいさつなどがそれぞれはなむけとして贈られた。この日、教会内では、美しい生徒たちが、それぞれ未来の夫と相睦じく席についていたが、中には、振袖姿の麗人も幾人か見うけられた。

このような国際結婚をする日本人女性の数は、年々増加していった。だが、夢と希望に胸をふくらませ渡米した中には、幸せな生活をおくっている女性もいるが、その反面、夢破れ、日本に帰るにも旅費がなく、異郷の地で日本に帰れる日を楽しみに一生懸命働いている女性が、意外に多いとか。

昭和三十三年には、米軍の航空合同輸送部隊が羽田飛行場から立川基地へ移動してきた。これは占領時代が終ると同時に、羽田飛行場を国際空港にする企画をたてていた、日本政府の要請によるものであった。

同じくこの年には、台風二十二号が伊豆地方を襲った。時の立川基地司令官は、台風の日本に及ぼした被害の甚大であることを全基地に訴え、マットレス百枚、セーター一五〇〇枚、その他多数の衣料品を集め、ヘリコプターやトラックで、とくに被害の大きかった、修善寺、三島方面に急送した。この国境を問わぬ友情ある行為に対し、日赤本社より島津氏が来訪し、司令官に面会し、罹災者を始め、日本国民の感謝の意を伝えた。

昭和三十六年七月、従来立川基地の中心を走る滑走路をはさみ、東西にそれぞれ二つの異った名称を持った空軍施設があったが、府中基地を含み一つの空軍基地に統合され、その名称も六一〇〇管理部隊立川基地となった。この統合によって、府中基地を始めとし、グリンパーク（武蔵野市に所在する米軍家族住宅）グランドハイツ（練馬区に所在する米軍家族宿舎）は、いずれも立川基

地の管理下に置かれた。

日本人従業員の人員整理

昭和三十七年に入ると、朝鮮動乱勃発と同時に、大量に雇用された基地従業員も、戦乱が治まってくるにつれ、作業量も縮小され人員整理が始まった。これに対処し、基地日本人従業員の雇用主である日本政府は、武蔵野職業訓練所立川分室に依頼し、駐留軍要員離職、転職対策の一環として、職業訓練生の募集を始めた。

この職業訓練の特典は、

一、授業料は無料、教材は貸与。

二、失業保険受給者はコース修了まで引き続き保険金を支給。

三、修了者には就職の斡旋をする。等

訓練職種科は、配管科、トレース（写図）科、謄写印刷科、ブロック建築科等で、各科とも訓練期間は六カ月。

この訓練は、時の基地従業員にとってはたいへん明かるいニュースであり、人員整理を心配していた人々にとっては、大きな心の支えとなった。

ソラーズ中佐の事故死

昭和三十七年に、私がたいへん感銘を受けた、基地関係のできごとがあった。訓練飛行中、事故で操縦不能になった愛機を、日本の民家に墜落するのをなんとか避けようとして、自分の生命を賭して海上に誘導し殉職した、青森県三沢米空軍基地の戦斗中隊司令官、ジョン・A・ソラーズ中佐に、その名誉を讃えて、空軍功労章および特別飛行十字章が贈られたことである。

三沢基地近郊の密集した民家に墜落すれば、自分の生命は救えるものの、計り知れない死傷者を出すことは必至。ソラーズ中佐の胸中にある勇壮な〝空軍魂〟が、同中佐のとるべき道を教えたのであろう。愛機を海上へと誘導し、三百フィートの上空で、ジェット機から脱出したが、時すでに遅く、救助班のヘリコプターが同中佐を海から引き揚げたときは、息を引きとっていた。日本の武士道にも通ずるソラーズ中佐の英雄的な行為は、米人のみならず多くの日本人にも、たいへん感動を与えた。

立川基地の飛行停止

昭和四十年五月、長い間中止されていた立川基地拡張問題は再び始められ、反対派のデモ隊と機動隊が衝突、四十八人が検挙された。この日は、一日基地内の米人は、すべて外出が禁止され

た。この時の私たち基地従業員の立場は、まことに微妙で複雑だった。

続いて四十三年十二月、ついに米空軍司令官は、砂川地元民の強硬な反対をおしきれず、流血の惨事まで見た立川基地滑走路の延長計画を取り消すことを発表。多くの犠牲を払った地元民の主張が通り、砂川紛争に終止符がうたれた。

翌年十月、立川基地における飛行業務の停止が発表された。立川基地の飛行停止は、米軍が進駐してから二十四年ぶりのことだ。これは地元民の滑走路延長計画をおしきれず、航空部門を横田基地へ移動することを決定したためである。

立川から横田へ

かくして航空機部門を第一陣として、横田基地への移駐が開始され、それにともなってこのころから、大幅な基地従業員の整理が相次ぎ、一時は二万人を超していた従業員も、この時点では五千名を割っていた。

十二月一日朝まで、飛行場東地区ランプに翼を休めていた立川飛行場最後の米軍救助中隊の救難機も、同日午前十時部隊とともに移動。かくして米航空機が姿を消した。それと同時に管制業務も停止された。十月三日、空軍司令部の移駐発表以来、二カ月たらずで、立川基地の飛行活動は事実上全面的に停止された。

この日までコントロールタワーで管制業務にあたっていた通信隊も、最後の一機が立川基地を飛び立って任務を完了。また気象中隊も、同日午後最後の観測を終って業務を終了した。

最後の一機が横田基地へ移動して、立川基地滑走路のライトが遂に消えた。

思えば、終戦以来輝いていたライト、青、緑、赤のランウェイライトが夜空に映えて美しく、車窓の旅客の目をそばだたせ、立川の人々の郷愁を誘ってきた。冬の凍てついた夜に冴えかえる冷たいあかり、夏の夜霧ににじむ灯は、それだけで美しい風物詩だった。

初冬の夕方、車で通過する滑走路付近は、夜の帷が深く降りてまっ暗。ライトにシルエットを浮かばせていた機影は今はなく、ひっそりと静まりかえっている。

昭和四十五年七月、立川および横田両基地における米空軍の支援業務統合計画の一環として、従来まで立川基地において、管理運営されてきた支援業務は、サービス部門の一部を立川基地に残し、横田基地が引きつぐこととなった。この業務移管には立川基地を始めとし、府中基地、大和基地（家族宿舎）関東村（調布に所在する米軍家族宿舎）グリンパーク、グランドハイツなどが含まれている。

昭和四十七年三月、航空自衛隊の一部が、宇都宮からヘリコプター五機で、立川基地東部地区に移駐した。

同じくこの年の四月、美濃部東京都知事が、横田、立川両基地をヘリコプターで視察。基地問

題で構想を練った。

続いて七月には、日本政府に対し、米軍施設返還の一環として、グランドハイツが決まり、居住していた米軍家族が、横田基地に作られた高層アパートに移住した。

続いて四十八年一月、米軍に接収されていたグリンパークの返還が決まり、グランドハイツに続いて横田基地へ移住が始まった。

同年五月、宇都宮より航空自衛隊員の第三陣が立川基地に移駐を完了した。第一陣、第二陣、第三陣の移駐の結果、隊員数は約五〇〇名、飛行機は二十八機となった。

また六月には、ジョンソン基地（旧豊岡航空士官学校）も完全に閉鎖され、日本政府に返還された。

かくして関東周辺の米空軍施設は次から次と返還され、立川基地にいくつかの部門を残し、他のすべての機能は、横田基地に移管された。

横田基地

ここで横田基地について少しふれてみたいと思う。元来私の古巣は立川基地なので、終戦当時から現在の横田基地を良く知っておられる村野助治氏（村野氏は秋川市二宮に在住。第二次大戦で負傷され、昭和十五年兵役免除となり除隊。横田基地の前身である陸軍航空審査部に勤務、終戦を迎え残務整

理をされた。米軍の進駐を迎えた十月、名もあらたまった横田基地に勤務。五十一年六月定年退職）に聞いた話しでは……。

「旧陸軍の飛行場ができる以前、今の横田基地のあたりは、武蔵野特有の雑木林と、松、桧の混じった原野で、南北に走る日光街道（現在の国道十六号）に、五日市街道が今の横田基地の第五ゲート（自治会館横の道を基地に向うと、十六号に面した所にある通用門）の所で交差していた。そして日光街道は第五ゲートの所より、今の基地内の中心部を通り一直線にのび、瑞穂町に通じていた。したがって現在の国道十六号線は飛行場ができたため、迂回するようになった。

現在の基地内で十六号線に沿ったあたりの山林中には、養狐園（狐の飼育場）、誠明学園（現在は青梅市新町）、火葬場等があり、その東側はほとんど雑木林で覆われていた。瑞穂へ通ずる当時の日光街道はとてもさびしく、大の男でも夜一人歩きは気味が悪く、事実、追いはぎにあった人もあるぐらいだった。

このように今の基地の以前は、見渡す限り平坦な武蔵野の原野だった。支那事変が勃発すると同時に、日本陸軍が飛行場建設計画をたて、昭和十三、四年に山林は切り開かれ、十五年には飛行場と、飛行実験部（旧教会の南側）、気象班（基地内の消防署のあるところ）、その北側には陸軍飛行整備学校などが開設され、昭和十七年には飛行実験部は審査部と名称が変わり、終戦まで続いた。なお拝島駅に近い所には、四三地区と呼ばれていた所があり、ここには陸軍航空廠の燃料倉

庫があった。

この当時は同飛行場を、福生飛行場と呼んでいたが、米軍が進駐すると同時に、誰れがいいだしたかわからないが、横田基地と呼ぶようになった。

昭和二十年の終戦と同時に、軍人は復員、軍属は解雇され、それぞれ出身地へと散っていった。終戦時の審査部本部長は航空本部長も兼ねていたが、玉音放送がなされた直後、市ガ谷の航空本部長室で自刃された。また総務部長をされていた隈部少将は多摩川の五日市線鉄橋上流のあたりで、一家六名がピストル自殺をとげた。

このように、主のない審査部へ昭和二十年九月三日夕闇の中を、占領軍の先遣隊（約一〇〇名）が、数台のトラックやジープに分乗し進駐してきた。

さて米軍が進駐したものの、広い飛行場には人影もなく、電気、水道とてもない。建物は荒れほうだい。そこで基地の整備を急ぐ米軍は、西多摩郡下の各町村に対し、至急日本人労務者を集めるよう労務要求をだしてきた。続々と集められた労務者たちは、毎朝今の基地内のソフトボール用のグランド付近（旧審査部の正門のあった所）に整列させられ、でずらをとられ、各作業場に送られた。

二十年から二十一年の末頃までは、日本国中いずこも食糧難で、当時基地で働いていた人たちはよく飛行場付近で草の芽などを摘んで持ち帰り、食糧のたしにしたものだった。私も戦時中

は、支那の戦場で現地人を徴用し、築場、道路工事、架橋作業等をやらせたが、当時彼らがなめたであろうみじめさを、こんどは私がしみじみとあじわさせられた。

ところで飛行場についての変りようは、今の滑走路は、幅、長さともに昔の倍以上に広がっている。この滑走路工事は、二十一年頃、米軍の工兵大隊が、数百台のダンプ、ブルドーザーを使い、昼夜の別なく多摩川より砂利を運び、たりないぶんは、今の福生市営グランド周辺から第三小学校にかけて砂利を採取し、基地へ運びこんだ。この拡張工事は約二か年がかりで、今日のように巨大な飛行場が完成したのである。

終戦当時は、基地内の所々にはまだ武蔵野の面影が残っていた。とくに正門を入ったあたりには、いくつかの建物がならんでいたが、あとはまばらでほとんど雑木林であった。また基地の外を見ても、今の十六号線に面しての商店などは一軒もなく、見渡す限り畑と桑林で、商店街は福生の駅前にあるだけ。

このようにのどかであった基地の内外も、昨今では十六号線に車が長蛇の列を作り、色彩華やかな看板をかけた商店が軒をつらねている。こんな変りようは当時では想像もつかなかった。

また基地内をみれば、東部地区には、関東周辺の米軍施設の返還にともない移住してきた、家族を受け入れるべく高層アパートが次から次と建てられ、基地の空地には所狭しと大きな建物がどんどんと建っている。そして、資材、器材を満載したダンプやトラックがうなりをあげて走り

まわっている。

かくして基地の内外には、武蔵野の面影は完全に姿を消してしまった。

このように急速に変化していく基地を見ていると、なんだか自分だけがとり残されたようで、淋しさを感ずるよ。」

と村野氏は、昔を懐かしむように語っていた。

かけ橋に徹して

最後に終戦から今日と、長い基地生活を通して私が接してきた、米人感を申しあげたい。

終戦から数年間、いわゆる占領軍時代、日本に駐留していた米人の大半は、いずれも死線を超えてきただけに、気も荒らかったが、人間味豊かであった。

ある意味では、日本人を尊敬し、敗戦国民の日本人だからといって馬鹿にするようなことはけっしてしなかった。米人特有の陽気さや、あまり物事にこだわらない点など、私たちの学ばねばならない良いものをたくさん持っていた。

しかし最近日本に赴任してくる米人の過半数は、官費旅行を楽しもうという人や出稼ぎ気分の人が多く、それだけに人情味も薄い。自分の任期中、誠心誠意つくしてくれた日本人従業員に対しても、帰国の時は通り一遍のあいさつで、さよならをする人が多くなった。それだけに昔の米

人のように、尊敬に値する、心から親しめる人が少なくなってきた。まことに残念なことである。

私も、基地とともに三十年。青年時代から壮年を過ごしてきたが、過去を振り返れば、想い出は次から次へと枚挙にいとまはなく、いずれも昨日のことのように鮮明に思い出される。

とくに終戦直後、敗戦国日本の復興に少しでも貢献でき、日米親善のため微力を捧げることのできたことに、満足しているものである。

このたびはからずも、終戦から今日までの米軍基地の断片を、本誌を通じて皆さまにお伝えする機会を得ましたことは、喜びにたえません。

（米空軍横田基地人事部勤務）

福生駅かいわい

川鍋幸三郎

福生駅の三十年

青梅線が開通したのは、今から七十年も昔の、明治二十七年十一月十九日のことであった。これよりさき、青梅・奥多摩地方の石灰石採掘が着目されて、福生村の田村半十郎氏はじめ、羽村・青梅などの資産家十九名が発起人となり、青梅鉄道株式会社が設立された。明治二十五年七月三日のことで、総会が開かれたのは青梅町の坂上旅館であった。当初の工事費予算は十万円、決算は二割強の超過で、十二万一千九百三十五円であったという。（『定本市史青梅』）

坂本郷一さん（福生市熊川八五六）が福生駅に勤務するようになったのは、昭和二十四年である。以後現在まで勤続であるので、駅長以下十六名の駅員がいる福生駅では最古参の一人であって、戦後の福生駅のうつりかわりを肌で感じている人である。私はあわただしい仕事の合い間の中で、永久保存書類なども見せていただきながらお話をうかがわせていただいた。

青梅線は昭和十九年四月までは、青梅鉄道株式会社の私有であった。社線といっていたが、そのころはホームは一本であった。今の駅舎ができたのは昭和二十三年、それまでは当直の駅員が押し入れの中に寝るような始末であったが、この時になってようやく改善された。

坂本さんは福生駅勤務となる前、中神駅に二年間勤めたが、二十二年九月にはじめて給料をもらった。二ケ月分であったが、中をあけてみたら、なんと二百八十円が入っていた。当時、駐留軍関係だと日本人でも月千円ももらえたというご時世で、国鉄の待遇の悪さはひどいものであった。

乗降客は、戦前横田に陸軍整備学校ができてから増加したようであるが、戦後はアメリカ軍が進駐して来て二度目の増加を示すようになった。そのころは、乗降客の一割くらいは外人で占めていただろう。

困ったことといえば、言葉が通じないことで、これには閉口した。駐留軍の中には、ひどい乗客もいたもので、占領軍意識があったためか、言葉が通じないことによるものかはわからなかったが、切符を買わないで電車に乗り込むなどという者もかなりあった。

当時の車輛数は、朝夕のラッシュ時に四輛編成、日中は二輛編成であった。〝駐留軍専用〟と車体に書かれた車輛が半輛ほどあって、その車輛の半分だけは車内が改装されている。座席などは外人向きに広くゆったりとできていた。

日本人専用車？の方は、ラッシュ時などは押すな押すなの超満員、しかし駐留軍専用車の方は三～四人がふんぞりかえって乗っているなどという光景もちょくちょく見られたものである。

別に日本人が乗って罰せられるというものでもなかったらしいが、当時は外人に対する日本人の意識は、今とだいぶちがってかなりの隔りを持っていたため、日本人が乗り込んで行くというようなことはなかった。

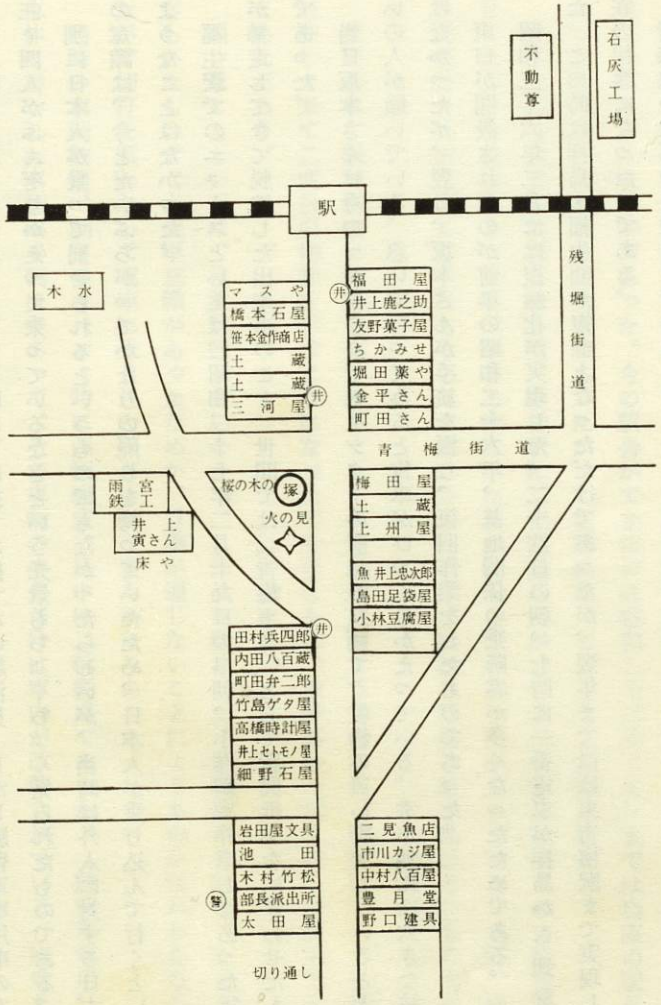
福生駅でのニュースといえば、昭和二十七年二月十九日の早朝、小作駅に停車してあった貨車が暴走してきて脱線した出来事のこと。世間では〝青梅事件〟として新聞紙上をにぎわせたものであった。

当日坂本さんは今のマルフジフードセンターの前身の丸藤で、乾物の買い物をしていると大ぜいの人が騒いでいる。急いで行ってみると貨車がひっくりかえっている。幸い他には大きな被害はなかったが、翌日、坂本さんが手旗を振り、復旧作業をしたものであった。

東口が開設されたのが前年の昭和二十六年、基地関係の乗降客が多くなったためである。

昭和三十六年二月には複線化が実現した。二十八日の朝、七時に一番電車が拝島から到着した。この時は拝島・福生間が複線となっただけであったが、翌年までには東青梅駅まで実現し現在の状態になったのである。

青梅線の大部分の駅で小荷物扱いが廃止されたのも、この時からである。そして現在でも小荷



大正時代の福生駅前商店街

物扱いをやっているのは、福生駅をはじめ拝島駅・河辺駅などだけである。

同じく三十六年十月には、現在の中ホームが完成した。跨線橋もこの時にできた。

ついでに牛浜駅のことをちょっとふれておこう。

牛浜駅は、昭和十九年七月に開設されている。はじめは、朝夕の定期券乗降客のみを扱っていた。もちろん切符は売っていなかった。仮駅であって、陸軍の整備学校関係のためにつくられたようなものであった。

福生の七夕祭りがはじめられたのは、昭和二十六年。今でこそ八月にやっているが、その頃は七月六日から三日間であった。二十九年からは、青梅線も期間中毎日数本が増発され、駅でも竹飾りなどをつくり飾った。二〜三年続いた。

参考までに昭和五十一年度の七夕祭りの場合、日曜日であった八日のみ二本の臨時電車が増発された。八月七日土曜日の乗客は五七、〇〇〇人(ただし、切符・定期券によるものだけで、途中下車の数は含まれていない)、一五〇万円の収入があった。

数年前、福生駅の切符は〝福を生む〟として、入場券などは爆発的な売れ行きをしめしたが、近ごろではそれも一段落し、平日で約三万人の乗客がある。西口と東口との乗客比は六対四くらいであり、西友ストアができてからの東口利用者の増加がめざましい。

季節による乗客数の変化はあまりなく、曜日の上での変動が大きい。雨にでもなれば別だが、

土曜、日曜は多いそうである。

昭和三十五年十月一日に発行された『福生町誌』によると、大正二年の福生駅の乗客数は一年間に三万一千六百五十五人だったそうである。これは一日あたりにすると、なんとたったの百六十三人であり、その少なさに驚ろかされる。

前記のごとく、現在では平日で約三万人の乗客があるということであるから、大正二年に一年間に乗せた人数を、今では一日で扱っているという発展ぶりである。

最後に、昭和二十四年以後の一日平均の乗客数を表にして掲げてみる。なお、駅の資料では降客数は通常乗客数と同じくらいあるようなので、表には掲げなかった。したがって一日の乗降客数はこの表の数のほぼ倍になるということである。

戦後の福生駅乗客数　（一日あたり）

昭和二四年	定期券	一、三五〇人	計　三、〇〇〇人
	その他	一、六五〇人	
昭和三〇年	定期券	三、一七七人	計　五、三三五人
	その他	二、一五八人	
昭和三五年	定期券	四、三一四人	計　六、七六一人
	その他	二、四四七人	
昭和四〇年	定期券	六、五二四人	計　九、四六七人
	その他	二、九四三人	
昭和四四年	定期券	八、五四八人	計　一二、〇〇二人
	その他	三、四五四人	

昭和五一年　定期券、その他　計　約三万人

本町独立のいきさつ

福生駅前商店街の発展について、事情をくわしく知っている人を紹介してほしい旨を話したところ、珠算学校の山崎さんから即座に中野常吉さん（福生市本町一一七）の名があげられた。

青梅で生まれ育った私には、福生の事情はどうも疎い。土地っ子ならばカンというのだろうか、働くものであろうが、それがダメなのである。

中野常吉さんのことであるが、四月も末のある日、山崎さんに案内されて、駅前のお宅（洋服店経営）にお邪魔した。現在は悠々自適のご身分である。

いろいろ古い記録を集めておられ、ご自分では昭和十年より日記をこくめいにつけておられる。途中、中断したこともあるということであるが、昭和二十七年からは完備している。政界や社会情勢も記録されている大切な資料である。

常吉さんは明治二十七年十月二十一日の生まれ、今年八十二歳である。二度にわたり、明治・大正・昭和の駅周辺のようすを伺ったが、以下にまとめたものは、とくに戦前の、それもできる限り昔にさかのぼり、駅前の状況を中心にしてみた。

常吉さんが隣の羽村町川崎（当時は西多摩村といっていた）から駅前に移ってきたのは、大正九年九月十九日であった。

それまで五日市の洋服店で修業をしていたが、店をどこに出すかいろいろ考えた。はじめは八王子か青梅に、と思ったのであるが、それぞれ兄弟子が出してしまったので出すわけに行かない。そこで福生に店を出したのである。

その頃、福生に洋服店は一軒もなく（現在の奥多摩町の地でさえ三軒あったものだという）、しかも、同業者から〝福生は地の利がよい〟といわれたことも左右した。

本題に入ろう。

青梅鉄道が開通したころ（明治二十七年十一月十九日）は、今の本町は長沢部落に属していた。場所から長沢部落に近いということと、当時は駅前といえど戸数も多くはなかったので、便宜上長沢に入れてもらっていたのだろう。

ところが大正八年だったそうであるが、神明社のそばにある稲荷様の稲荷講のお祭りのとき、駅前にも戸数がだいぶふえたので、そろそろ独立しようじゃあないか、ということになり、委員（今でいう町会役員にあたる）を七名選び独立した。

このへんは昔から奈加といっていたが、通称は「新町」であった。この呼び方は第二次大戦後まで通用していた。

福生に町制が施かれたのは、昭和十五年十一月十五日であったが、そのころすでに本町と呼んでいたかどうかは不明である。市役所で調べたり、古い記録をたどったりしてみても、今の正式名である〝本町〟という呼称がいつごろから使われるようになったかはっきりしないそうである。

さて、福生村奈加、通称新町（現在は本町）の戸数はどうであったのだろうか。中野さん宅には、大正九年十一月に、新町の守護神として祀られた不動様の氏子帳が保存されている。これによると当時の本町の戸数は八十五軒であった。記憶力の良い中野さんに、駅前の商店街を再現していただいたので概略を図示し載せておこう（**四〇頁参照**）。大正時代の駅前通りを記録する貴重な資料となるであろう。

（中野さんのお話のほかに、町田富二さんの話と、地元の二、三の方のも入れて、前後二十年ぐらいの配置図となっている。多少の記憶ちがいもあろうかも知れぬ点はご了承ください）

銀座通りの今昔

戦後の銀座通りのうつりかわりについて東恒さんからお話を伺った。

東さんは福生市志茂一六八番地で洋服店を開いている。

昭和飛行機会社に勤めていた東さんは、この地が発展するのではないかと予想し、市内のTさんから土地を借りて家を建てた。昭和十八年の九月のことであった。

あとでわかったことだが、当時、志茂一帯は区画整理の青写真ができていたようである。これはゆくゆく店を開きたいと思っていた東さんにとっては、たいへん好都合であった。店を開いたのは戦後まもなくであった。

水道はもちろんなく、深さ五メートルほどの井戸を掘った。第二次大戦中の統制経済下であったため、一番苦心したのは建築材を確保することで、官庁などによく足を運んだ。

道は青梅街道とよんでいたが、今の道とほぼ同じ幅であった。しかし舗装はされていなく、草道というのか、砂利を敷いたりしたものである。馬車や荷車がよく通った。

店はというと、今の銀座通りなどという呼び名もなく、道に面して四～五軒あったくらいだった。

ほとんどが桑畑やさつまいも・オカボ畑で、町内の戸数も全部で二十四・五軒、集会は中福生といっしょであった。

「ここから今の福祉会館のところにある坂が見えましたよ」といわれ、びっくりした。

当初はそんな淋しい通りであったが、農地解放がおこなわれたころを境にして、店も家も増加してきた。小河内村から移って来た人もいる。整備学校（現横田基地）に勤めていた旧軍人軍属の

人もいた。こうして商店街らしくなってきたのである。

銀座通りという名称であるが、たしか福生の七夕祭りがはじめられるより以前のことだった。銀座まつりをやったそうである。

付記・福生の七夕祭りのはじめについては、〝ふっさっ子・第二集〟で佐藤三郎さんがくわしく書いておられるので、参考にしてほしい。

戦中戦後の福生駅周辺

村尾千代子さん（福生市福生八〇四番地）は、昭和三年生まれである。

加美に生まれ、福生七七二番地（現在は本町一三六番地にかわっている）に四歳のころ移り、昭和十五年、現在の住所に転居した。駅の近くに住み、戦中から戦後の周辺史を正確に知る一人であろうと思われる。私は夏の暑い日、お宅に伺って駅周辺の変貌をお聴きした。

村尾さんの家は、当時すでに砂利販売をしており、昭和十四年からは福生整備学校の工事がはじまると、資材としての砂利・砂を一手に納入し、終戦までそれが続いた。

昭和十五年に小学校を卒業し、青梅町の第九高等女学校（現在の多摩高等学校の前身）に通学するようになったので、そのころの青梅線や福生駅についての記憶は鮮明なのである。

福生駅の牛浜寄り踏切りにはしゃ断機があって電車が通過する時間になると、駅から係員がやってきて、あげ下げをしたものである。

今では大事故につながることであろうが、その係員がしゃ断機のところに行かないで、村尾さんの家に立ちよりおしゃべりをしている。そうこうしているうちに電車が通過してしまった、ということもちょくちょくあった。のん気なご時世だった。

当時、朝夕の本数は三十分に一本くらいで、これはまあ今とそれほど差はないが、日中になるとずいぶん本数が減るのである。

「青梅線　石より人が　安く見え」などという川柳があったらしいが、貨車の本数はさして多くなく、駅の近くで砂利・砂の商売をしていて、店の人などとよく「貨車が通ったらお茶にすべえ」といって、お茶の時間の目印にしたくらいで、多くはなかったということである。

貨物は主になにかというと、石灰石・砂利・砂・材木であった。

余談になるが、多摩川の水は今でも都民の飲用水に使われている。今でこそ採取が全面禁止にされているが、多摩川の石・砂利・砂は道路や建築用資材として大東京の発展に大きな貢献をしてきたことはご承知のことであろう。

福生駅から羽村の川崎川原まで引込み線が通っていたことを記憶している人もあるであろう。

当時は羽村の堰より上流での多摩川からの砂・砂利採取は禁止されていた。だから福生が採取地点としては最上流であった。理由は都民（府民）の飲用水である水を汚すから、ということであったらしい。

電車は二～三輌の連結で、ドアは手で開けなければならなかった。自動ドアになったのは、昭和十七年か十八年のことだったと思う。

村尾さんは福生から乗り、青梅まで通学したが、四年間というもの学生割引の定期券の運賃は同じで、一年定期で十八円七十二銭であった。大人はたしか青梅まで片道十五銭だった。

乗客のスタイルは、ほとんどが洋服。昭和十五年ころは、乗降客が少なかったため、ほとんど駅員と顔なじみであった。五～六人いた駅員も、社線であったためにほとんど転勤などというものがなく、町の駅という感じであった。

「誰々さんがまだ乗っていない」というので発車しないで待っていてくれたり、発車しようとしていても「オーイ、待っていろ」とかなんとか大声を出すと、ちゃんと待っていてくれたりしたものだ。まだ国有鉄道ではなかったから、こんなことができたのかも知れないが、そのサービス精神？はまさに満点ともいうべきか。しかも乗ろうとしている方はこれでいいかも知れないが、乗っている方でもブーブー不平でも言うかと思うとそんなことは全然ない。とにかく良き時代だった。

ふだんは駅で降りる人は、ほとんど顔ぶれがきまっていた。たまに駅から多くの人が降りようものなら、周辺の人々は「きょうは市のようだ」といって、おどろいた。

市といえば、福生駅前に年二回市が開かれた。十二月二十八日の暮の市、この市でお正月用品や羽子板を買い、一月四日開かれたダルマ市ではダルマを買ったものである。

駅関係のエピソードといえば、昭和十四、五年のころは、線路がよく冠水して電車が不通になった。夏から秋にかけての台風のシーズンになると、今の西友ストアあたりから線路にたくさん水が出る。そのために三日間も電車が止ったことがあった。こんな時には、近くのオバサンや女の子たちが、待ってましたとばかり下駄をたくさん持ってきて、それこそ家中の汚れた下駄を（当時は日常のはき物は下駄が普通だった）線路で洗ったものだ。

これは他の人から聞いた話であるが、昔は青梅線より東側では、梅雨時や台風の時にはよく出水があったという。アサノブロック工場の所では、昭和十年ころまでは泳げたものだそうである。また牛浜グランドあたりでも、水びたしになったことがたびたびあった。

駅周辺のようすはどうかというと、昭和十五年ころの東側一帯は（もっとも東口が開設されたのは、昭和二十六年十二月であって、そのころはまだ砂利の積みおろし場であった）、小松屋（料理）、不動様、呑口屋、森田六助さんの家（農家）土屋ボール箱屋とその長屋、岸製材所、馬子の長屋など

があったくらいで、あとは一面に桑畑やオカボ（陸稲）さつま芋畑が続く地帯であった。

現在は基地の中になっているが、誠明学園（現在青梅市新町に移転）と養狐園があったのもこのころまでで、それでも線路の東側の大字福生地内には全部で二十三軒ほどの家屋があった。

それが、福生整備学校ができるに及んで、昭和十四年ころ福生町本町は一町内と二町内しか分かれていなかったが、軍人・軍属の家（今でいうハウス）を農家の人が建てるようになり、また個人の商店なども開店するようになった。そして、十五年には一度に本町が八町内までできるほどに発展したのである。

大聖病院は当時は宮川産院といったが、開院したのもこのころのことであった。また福生病院が府立の蚕糸支所あとにできたのも十六年のことである。

軍関係の建物は終戦時には三十軒くらいあったであろうか。

終戦の年は、とにかく秋に雨の多い年であった。進駐軍が福生飛行場にやってきたのが二十二年の九月六日、そしてどこからどうしてやって来たのか、早くも慰安婦が十月ころには福生に現われる。陸軍々属の住んでいた長屋が十棟ほどあったが、ここが慰安所にあてられた。町内にはいたるところにいかがわしい女性が住みつき、外人が出入りするようになった。それは昭和二十五年六月の朝鮮戦争勃発にともないピークに達した。

こうした中で、町・軍当局は風紀の粛正を目的に、外人相手の店を一カ所に集めることにし、

赤線で地図上に区域を指定した、これがいわゆる赤線のいわれである。これに対して、飲食関係の業者などが、この案に反対し、トラック二台に〝赤線区域指定反対〟の字を書いた横幕をぶら下げてデモンストレーションをしたのもこの時である。昭和二十八年であった。

付記　赤線ができた経緯や町の状況などについては、〝ふっさっ子第二集〟の座談会・福生第三小学校とPTAでふれられている。飾外次郎さんはじめ、出席者のなまなましい話が当時のようすをよく物語っている。ご一読をおすすめしたい。

福生商店街の発展

福生商店街の発展をふりかえってみると、大きくながめ、三つの時期があったようである。すなわち、第一期は福生整備学校ができた昭和十四・五年のころ、第二期は終戦にともない連合軍が駐留してきた時期、両時期とも軍関係者や基地従業員の増加となって、直接・間接に街はその恩恵を受けることとなった。

第三期は、昭和二十六年ころから多くの人々により叫ばれるようになった、基地依存の町からの脱皮の時代である。

福生の七夕祭りが催されるようになったのは、その努力の表われの一つであった。

昭和三十年ころには、マルフジフードセンターが、西多摩地方では画期的ともいうべき店内改

装をおこなっている。商品のハダカ陳列がそれである。続いてコヤマデパート、石川デパートも改装をおこない、街は一段と商店街らしくなってきた。

そして、現在では駅東側に西友ストアもできて、周辺市町村の買物客をひきつけているのである。

（福生第一中学校教諭）